

春も夏も秋も冬も死の香りを漂わせている。人はいつだって生まれ、そして死んでいく。魔女は死人を生き返らせることはできなかったから、せめて死なないようにと祈りながら薬を調合していた。ありがとうございます、と言いながら人々は薬を飲んで命を保ったのに、戦によって死んでいってしまったのだ。

醜い魔女は美しいものが好きでした。宝石や美術品をコレクションし大事に大事にケースに収め、絶対に触れることがないようにしながら眺め暮らしていました。魔女はあるとき成功報酬とともに菓子を贈られます。宝石を模した琥珀糖が輝くケーキです。喜んだ魔女はけれど食べるべきかずっと悩んでいます。

魔女の力を測るには、言葉の精度を見ればいい。呪文を使っても間違いだらけでは使いこなせていない。簡単な呪文でも正確であれば威力は強い。私はもう魔法は使いませんよ。もう、魔女業は引退したのです。呪文に力を籠めることは罪深く、私たちは言葉に処刑されるが決まっています。

魔法の眼鏡をかけると文字が読める。魔女の私はいかにその眼鏡を与えてやった。喜んだ使いは私の蔵書をどんどん読んでいく。絵本、小説、実用書、魔導書。あ、これ私の日記も読んでいた。あ、これで私のすべてを伝えられたらどうか。かつての主にももらった眼鏡を外し、世界にさよなら。

朝。目を覚ますとまず私自身に魔法をかけている。長年続いた習慣はもう寸分違わなない日課。魔法をかけられた私は一日を自信満々に生きることが出来る。魔法をかけたから、私が魔女であることは揺るぎない事実で、どんなつらい依頼もひびい依頼も私はこなすことができる。なにしろ私は冷たく強い魔女なので。

魔女は空を眺めながら煙草をくゆらせていた。ベランダはぼかぼかと暖かく、もう春が近いのだとわかる。また一年たつたのだなあ魔女は煙を吐く。魔女はかつて普通の女の子で、将来を誓い合った男の子がいたのです。魔女になってしまった女の子は全てに別れを告げて、世界の生贄として生きるしかなく。

## 魔女の仕事は 覚悟を持って

氷砂糖  
140字小説集



Blueskyにて毎朝更新している140字小説の中から、魔女にまつわるものを6篇まとめてみました。フォーラム下の二次元コードは感想をお寄せください。喜びます。



魔女の仕事は覚悟を持って  
2025.12.07  
氷砂糖  
longway12km@yahoo.co.jp